

# 第1回 ロボットテストフィールド・国際産学官共同利用 施設（ロボット）活用検討委員会 議事要旨

日 時：平成27年12月21日（月）13：00～15：00

場 所：経済産業省本館17階東8 第1共用会議室

出席者：浅間委員、木村委員、鈴木委員、高橋委員、野波委員、加藤委員、原田委員、弓取委員、会川委員、秋本委員、北村委員、劔田委員、二槌木委員、森山委員（代理出席）、渡辺委員、飯塚委員、角山委員、山田委員、蔵持委員、新居委員（代理出席）、遠藤委員、田原委員（代理出席）、長尾委員、島田委員、岩見委員、松本委員、河野委員、山岡委員、白井委員、糟谷委員、佐脇委員、山村委員

- 議 題：
1. 開会
  2. 委員の紹介
  3. 検討委員会及び配布資料等の公開について（案）
  4. 福島イノベーション・コースト構想の進捗状況について
  5. 検討委員会の進め方（案）
  6. ロボットテストフィールド・研究開発拠点整備の進め方（案）
  7. 国際産学官共同利用施設（ロボット）整備の進め方（案）
  8. 自由討議
  9. 閉会

議事概要：

（1）検討委員会及び配付資料等の公開について（案）

資料に基づき事務局より検討委員会及び配付資料等の公開について説明があり、委員の了承が得られた。

（2）福島イノベーション・コースト構想の進捗状況について

資料に基づき事務局より福島イノベーション・コースト構想の具体化について、既に事業化が進んでいる事業例や平成28年度の主な取組の方向性等について説明があった。

（3）検討委員会の進め方（案）

資料に基づき事務局より検討委員会の目的や検討の方針、検討事項、スケジュールについて説明があり、委員の了承が得られた。

（4）ロボットテストフィールド・研究開発拠点整備の進め方（案）

資料に基づき事務局より優先的に実施することが適切と考えられる各種ロボットの活用テーマや各種ロボットの活用テーマ実施のために必要と考えられる施設、各種ロボットの活用テーマ実施を促進するための方策等について

説明があった。

(5) 国際産学官共同利用施設（ロボット）整備の進め方（案）

資料に基づき事務局より国際産学官共同利用施設（ロボット）に求められる機能やイメージ、ニーズ等について説明があった。

(6) 自由討議

主な発言は以下のとおり。

<ロボットテストフィールドの構想について>

- ・ テストフィールドの整備後3～5年は政府や県の支援が必要でも、中長期的には民間が運営を主導するような形となるべき。そのためには、10年スパンのプロジェクトデザインが必要。
- ・ テストフィールドという名称ではなく、何か象徴的な名称を付けるべき。
- ・ 試験対象となるロボットが社会導入されるまでのロードマップを作るべき。またその過程におけるテストフィールドの関わり方や求められる機能を明らかにしていくべき。
- ・ オンリーワンの施設にするためには、ロボットテストフィールドでしか行うことのできない、ロボット性能の評価体系とそのための体制を構築する必要がある。
- ・ 施設整備にあたっては、ハード面だけでなく通信規制などのソフト面を含め、総合的かつ省庁横断的に制度設計することが重要。

<整備すべき機能等について>

- ・ ユーザーによってロボットを使用する状況は様々である。ロボットの用途によって実証環境を自由に組み換えられるような、汎用性のある施設整備も必要。
- ・ ドローン試験では最低でも10km直線で飛ぶことができ、障害物もなく見通せる場所を用意する必要がある。
- ・ 今後、大きな無人機については、機体の安全審査が必須となろう。このような安全審査もできるような、試験飛行場としての機能も確保すべき。
- ・ 用途によっては基礎的基盤的研究が必要な分野もある。実用化段階だけではなく、こうした研究段階で求められる施設の整備も必要。
- ・ 試験中にプロトタイプ等が壊れることも想定した支援、例えば、損壊時の費用をカバーする保険が付保されるといった枠組みも検討すべき。

<ロボットテストフィールドの継続的運用のあり方について>

- ・ 拠点整備だけでなく、運営・管理も含めて継続性の観点から検討を進める必要がある。
- ・ 当施設の運営方針等を決断・実行していく事業主体を早急に検討してい

く必要がある。

- ・ 継続的な運営にあたっては経営・研究開発の両面からマネジメントが求められる。当施設をマネジメントする組織のあり方を早い段階から検討していく必要がある。
- ・ 性能評価のテストメソッドを権威あるものとして定着させるためには、これを構築し運用する主体が誰か、という点も重要な要素。
- ・ 研究開発を経た実証試験結果を更に次の研究開発にスムーズにフィードバックするようなPDCAサイクルの仕組みづくりが必要。
- ・ 開発者だけでなく実際にサービスを利用するユーザーがロボットにどのような機能を求めているのかを反映させる必要がある。
- ・ 日常的に活用してもらうための仕掛けとして、機体の認証・登録制度、ルール作りをこの地で行っていくことが望まれる。
- ・ 評価、試験を行う人々にとって再現性のある現場であるかどうかの検証が必要。そのためにはユーザー側の評価を施設に反映できるような仕組みづくりが必要。

#### <地域社会等との連携について>

- ・ ドローンのテストフィールドには広大な面積が必要となる。何らかの形で地域社会から協力や理解が得られないと、福島で10kmというテスト飛行の距離を確保することは難しい。浜通り地域で地域社会と共同で戦略を検討することも必要である。
- ・ ロボットテストフィールドの構想には、将来を担う子どもたちや学生にとっても、来たくなる、楽しめるような環境づくりという観点も加えていく必要がある。